

やんばる国立公園

いのち輝く奇跡の森

守り活かす人々の御願

ウガン

国立公園ものがたり

やんばる国立公園

いのち輝く奇跡の森  
守り活かす人々の御願ウガン

国立公園ものがたり



いのち輝く奇跡の森  
守り活かす人々の御願

国立公園ものがたり

やんばる国立公園と  
ともに歩む

日本の国立公園は、アメリカなど世界のいくつかの国立公園と異なり、集落や農林水産業などが行われている地域も含めて公園区域に指定していることから、公園内に人々の暮らしや産業があるのが大きな特徴です。そのため、国立公園の管理は、これらの人々の暮らしや産業などの調整を図りながら、地域の人々とともに進めています。

やんばる国立公園は2016年、全国で33番目に国立公園に指定されました。また、2021年には奄美大島、徳之島、西表島とともに世界自然遺産に登録されました。国内最大級の亜熱帯照葉樹林、琉球列島の形成過程で進化したヤンバルクイナなどの固有種や希少な動植物、石灰岩の海食崖やカルスト地形、マングローブ林などの多彩な自然環境が特徴です。また、山と海に豊穡を祈るウングミやシヌグといった祭祀行事をはじめ、この自然に寄り添い暮らしてきた人々の文化も歴史が深く、豊かです。

本誌が発行される2026年

には、国立公園指定から10周年、世界自然遺産登録から5周年を迎えます。ここに至るまで、やんばるの森にはどのような思いや祈りが込められてきて、ここから先、どのように育っていくのでしょうか。『国立公園ものがたり』ではこの地に暮らし、やんばるの自然と文化を心から愛している人々の声を集めました。

『国立公園ものがたり』は、国立公園制度100周年となる2031年にかけて行う「国立公園制度100周年記念事業」の一つとして、日本の全ての国立公園において作成する聞き書き集です。この『国立公園ものがたり』を通して、地域の宝である国立公園の自然、その自然とともに生きてきた人々の歴史、文化、ストーリーを見つめ直し、次の世代、次の100年にしっかりと引き継いでいただけることを願っています。

聞き書き集とは、話し手に自身の生き様を語ってもらい、その人の言葉をそのまま書き起こしてまとめたものです。口調や方言などもそのまま章化することから、読み手は話し手の人柄や感情をリアルに感じ取ることができます。

地域の人々が紡いできた国立公園のストーリーを、地域の言葉でお楽しみください。

目次

- |  |  |
|--|--|
| <p>04 やんばる国立公園<br/>生物多様性の森<br/>世界自然遺産へ</p>                             | <p>20 [聞き書き] 湧川ツヤ子さん<br/>五穀豊穡の祈り「塩屋湾のウングミ」<br/>その祭祀を司る神人の軌跡</p>        |
| <p>08 [聞き書き] 仲本いつ美さん<br/>古くて美しいやんばるの集落で、自然と<br/>つながる暮らしに新たな価値を見いだす</p> | <p>24 [聞き書き] 長嶺隆さん<br/>ヤンバルクイナはやんばるの森だけに<br/>生きる沖縄と世界の宝</p>            |
| <p>12 [聞き書き] 東村観光推進協議会<br/>地域への思いでつながるガイドが自ら<br/>フィールドを守る「レンジャー」に</p>  | <p>28 [聞き書き] 久高将和さん、市田豊子さん<br/>国立公園、世界自然遺産へ導いた<br/>生き物と森の潜在力、人々の協働</p> |
| <p>16 [聞き書き] 山川安雄さん<br/>やんばるの森を人の手で守りながら<br/>その豊かな恵みを地域で活かす</p>        |  |

# やんばる国立公園

亜熱帯の照葉樹がモコモコと広がる森。

ヤンバルクイナの声や

ノグチゲラの木を叩く音が響きます。

人もまた森から糧を得て、御願（ウガン）を捧げ、生きてきました。

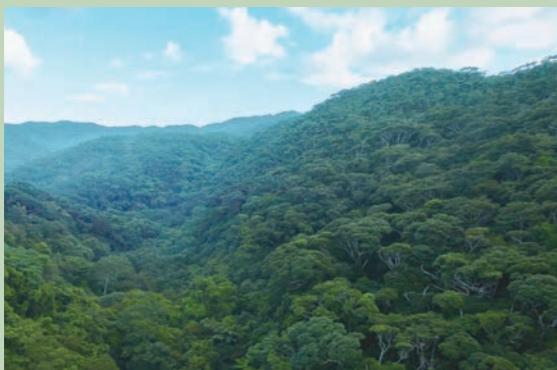
今改めて、森を守り、活かそうとしています。

いのちをつないでいくために。

## 生物多様性の森 世界自然遺産へ

やんばる（山原）とは、「山々が連なり森の広がる地域」を意味する沖縄島北部の呼称。8割以上を亜熱帯照葉樹の森が占め、ヤンバルクイナやノグチゲラなど希少な固有種を含む多種多様な生き物が生息しています。海食崖やカルスト地形、マングローブ林などの豊かな自然と、そこに息づく人々の暮らしが織りなす人文景観が魅力です。国立公園の一部は、2021年に「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」として世界自然遺産に登録されています。

国立公園指定年月日 | 2016年9月15日  
面積 | 陸域 17,352ヘクタール、海域 3,670ヘクタール  
エリア | 沖縄県



### 亜熱帯照葉樹林

やんばる地域は、温暖な気候と豊富な雨に恵まれ、その大部分がイタジイ（スタジイ）の優占する豊かな照葉樹林に覆われています。イタジイは春に花を咲かせ、森は鮮やかな黄緑と花の香りに包まれます。



### 豊かな地形

最北端の辺戸岬（写真）はカルスト地形の断崖絶壁で太平洋と東シナ海が一望できます。背後にそびえる安須森は2億5千万年前の石灰岩が隆起したカルスト地形の山。開闢の神アマミキヨが最初に作った場所といわれています。



### アクティビティ

慶佐次湾のヒルギ林（写真）ではマングローブや汽水域の生き物たちをカヌーやトレッキングで観察できます。また、森の中に現れる落差10メートルのター滝ではリポートレッキングが楽しめるなど各所でやんばるの自然を体感できます。



### 多種多様な生き物たち

琉球列島の固有種が多く、なかでもヤンバルトカゲモドキ（写真）、ヤンバルクイナ、ノグチゲラなどは、やんばる地域でしか見られません。生物多様性も高く、昆虫類では約3,000種が確認されています。



### 伝統文化

毎年、大宜味村の塩屋湾では「ウンガミ」、国頭村の安田では「シヌグ」（写真）と呼ばれる豊作・豊漁祈願の祭祀が行われています。集落の大切な伝統として400年以上受け継がれ、国指定重要無形民族文化財に指定されています。



### やんばる学びの森

「国頭村環境教育センター やんばる学びの森」では、ガイドと一緒に鳥の声を聞きながら森を歩くツアー、ナイトツアーなど、さまざまな自然体験を楽しめます。宿泊棟、キャンプ場もあります。



固有の生き物たちとやんばるの魅力を紹介いたします。  
やんばる国立公園の特徴

## やんばるの特徴・魅力

### 生物多様性の宝庫

国立公園のある国頭村、大宜味村、東村 村 一帯は日本全体の0.1%にも満たない面積で、日本で確認された鳥類の約3割、在来のカエルでは約4分の1の種類が確認されています。雨の多い亜熱帯海洋性気候がイタジイ（スタジイの沖縄名）やイジュ、オキナワウラジロガシなどの常緑広葉樹を育て、生物多様性の豊かな森を形作っています。

### 固有種が多い理由

やんばるを含む琉球列島の中央部（中琉球）の島々は太古に大陸から分離し、その後ふたたびつながることがありませんでした。このため種分化（進化）が進み、極めて固有性の高い生物相が育まれました。オキナワイシカワガエルやケナガネズミは周辺の大陸には近縁種が見られず、やんばるや中琉球にだけ生き残って進化した「遺存固有種」です。

### 独自の歴史と文化

近代まで、やんばるは那覇方面に薪炭など森林資源を供給する重要な場所でした。山では薪炭や琉球藍づくりも営まれ、炭窯や藍つぼの跡が各所に残っています。人々は海と山を祈りの対象とし、自然の恵みに感謝して暮らしを紡いできました。今も続く伝統的な祭祀シヌグ・ウンガミ（ウンジャミ）は、その生活文化を象徴する存在です。

聞き書き  
仲本いつ美さん

## 古くて美しいやんばるの集落で、自然とつながる暮らしに新たな価値を見いだす



森から海へと続く川の下流で、平屋の家々が寄り添うように並ぶやんばるの集落。一軒一軒の間には、防風林になるフクギ並木の細い道があり、その道を背後の森のほうへ上っていくと、集落の要である拝所と湧水地があります。迷路のような細道は妖怪マジムン<sup>うかんじゆ</sup>を避ける工夫でもあるのだとか。自然の際で、自然とつながって生きてきた人々の暮らしこそ美しいし、やんばるのコンテンツだという仲本いつ美さん。そこに新たな旅の魅力と地域の価値を見いだしています。

なかもと・いつみ／1987年生まれ、国頭村辺土名（へんとな）出身。Endemic Garden H代表取締役。大学卒業後、国頭村役場に入庁し、9年間地域課題に取り組む。独立して姉とともに、2019年地域限定旅行社「やんばるツアーズ」を起業。2022年古民家をリノベーションした一棟貸切の分散型ホテル「やんばるホテル南溟森室（なんめいしんしつ）」を開業。3集落で6棟展開し、昔ながらの生活や精神文化に触れられるプランが好評。

大人になって気がついた  
やんばる特有の豊かな幸せ

子供のころは自然の中で遊ぶっていうより、弟たちと一緒にゲームしたり、テレビ見たりっていう過ごし方が、私たちが周りも多かったです。ちよつと覚えてることがあるんですが、小学校の授業で先生に「小さい秋を見つけてこい」って言われて。帰り道にグアバ食べながら、「沖繩に秋ないじゃん」とか思っていました。ここはマジヨリテイではないって感じてたんですね。

今となつては、それが豊かさと価値だつてわかる。2月下旬から梅雨までの間を、沖繩で「うりずん」っていうんです。豊かな季節でそのときだけ食べられるものや芽吹く花があつて、そのときだけの幸せな感じがあるんです。特に3月は新緑の季節で、イタジイ（スダジイ）の森が、クガニ（黄金）色に輝きます。そのイタジイの花のもつたりとしたスパイシーな香りが辺り一面、漁師さんも嗅げるくらい海のほうまで広がるんです。1、2月は天気が結構ぐずぐずなんです。3月からは安定してきて、森がキラキラ輝いて、晴れ間にあの花の香りを嗅ぐと多幸感に包まれます。

幸せなうりずんの時期にお父さんとお母さんが仲良くするから、沖繩って早生まれの子が多いんですよ。学校に入るのに合わせて4月生まれにしようとか、うちは3LDKだから子供は2人ねとか、そんなこと多分考えていない。やんばるの豊かな自然環境が人となりや暮らし、考え方に影響を与えているなってすごく実感します。恥ずかしながらうちの娘も3月生まれます。私自身もすごく幸せな気分になるので、命の芽吹きを感じる喜びを名前にしました。正直子供のころは田舎の狭さが嫌でした。けど、楽しかった思い出もあるんですよ。特に印象に残っているのが山川安雄さんが企画した夏祭りのイベントの、奥間川の溪流トレッキングです。思ったよりハードだった記憶があるけど（笑）、みんなで一緒に川を遡上するっていう経験はすごくおもしろかったんですね。川の

途中で人の暮らしの痕跡があつて、炭窯があつたり、昔こういうふうに住んでいたんだよと教えてもらつたり、植物の話の話を聞いたり、いい思い出として記憶に残っています。

地元に戻つたのは、そんな思い出がきっかけではないけれど、ただ同級生で戻っていない子から「いい思い出がない」と聞くことも多くて。だから自分の娘には、たくさんいい思い出を作つてほしいなと思っています。

### 役場で育つた地域愛と使命感 地域限定旅行社とホテルを開業

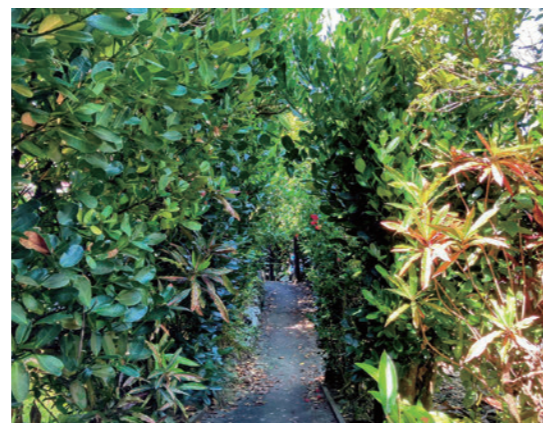
県内の大学を卒業して、国頭村役場に入庁しました。最初は企画商工観光課、2、3年目で福祉課、県庁にも出向して、6、7年目で森林管理課に配属。そこで森林ツーリズムや世界自然遺産に関わらせていただき、8年目のとき「世界自然遺産対策室」ができて配属されました。

役場は地域に密着した仕事が多いので、自然の魅力や手工芸がいろいろあること、地域の人たちの考え方に触れる機会があつて、地域に対する解像度がだいたい上がりました。いろんな話を聞くようになったし、大人になって理解できたこともたくさんあつて、再発見できました。その中で、安雄さんや久高さんと再会できたし、市田さんにも出会えました。3村の関わりも俯瞰できたし、使命感が育ちましたね。

それから地域への愛着が増して、もつと自分ができることはないかなって思いはじめたんです。福祉課のときに福祉の観点から社会福祉士



フクギを登るオキナワキノボリトカゲ。



集落の家々を台風から守るフクギ並木。

森林セラピーガイドを取得していて、沖繩県森林管理課のとき、森林ツーリズムに関わったのをきっかけに国内旅行業務取扱管理者の資格を取得しました。意外に仕事が好きでしたね。

9年勤めて役場をやめて、地域と観光をつなぐコーディネートをやろうと、2019年に姉と二人で地域限定の旅行社を立ち上げました。当時はコロナ前、マスツーリズム全盛で旅



緑側で芭蕉布が風に揺れるやんばるホテル 南溟森室の「久志（くし）」。



昔ながらのやんばるの集落図。写真提供/やんばるホテル 南浜森室

て、地域の人たちがちゃんと信じて畏敬の念を抱いていて、その姿がより説得力を持たせているのがある。その人たちの姿を介して、神の存在を感じるんですよ。

沖縄は自然も神様なので至るところに神様がいて、ご先祖様もニライカナイ（※）からしゅちゅう来ます。そんなウチナーンチュの精神世界にちよつとでも触れてもらえたら、旅がもっと充実するものになると思います。今まで気づかなかったことに気づいたり、触れたり、より豊かな旅になるんじゃないかなって思います。この湿度、気温、土や風の匂いの体感からも。

この辺もマジモンと呼ばれる妖怪がたくさんいるんですが、ユタさんいわく、悪いものでも全部退治しない文化が昔からあるんだそうです。

ら、私たちは参加することができた。いろんな気づきを得られたよ」と言われたときは、すぐくうれしかったですね。お客さまが「ありがとう」と言ってくれるのは驚きだったし、自信にもなりました。

### 沖縄の魅力はビーチリゾートから昔ながらの美しい「集落」へ

沖縄は1972年に日本に復帰して、国の援助を受けてインフラがどんどん整備され、それが80年代前半まで続いて、道がきれいになって人の行き来がスムーズになった。実は、祖父も民宿をやっていたんですよ。開業は50年前の「沖縄国際海洋博覧会」のころで、工事の作業員の方々の飯場として繁盛したけど、海洋博とインフラ整備工事の終了とともに、成り立たなくなってきたようす。

50年前は、軍事基地沖縄からビーチリゾート沖縄へ、うまく転換できた時期でもあったと思うんですね。いろいろな意見があると思うんですけど、当時の人たちが目指した「ビーチリゾート沖縄」は私たちの中に浸透したと思います。今私は、ビーチリゾートだけではない沖縄の多様さ、この「やんばる国立公園」に寄り添うようにしてある「集落」の暮らしの中に、魅力を見いだしています。海だけじゃなくて世界自然遺産にもなり得る森があって、豊かな精神文化がある集落があって、伝統芸能があって、手芸があって……そんな沖縄の多様な面を、今海外のお客さまも日本のお客さまも求めてくださる。

豊年祭の時期に集落で音を鳴らしたりすると、邪気を払って本当に雰囲気は良くなるんですよ。家や集落にあるシーサーや石敢當、集落の道がまっすぐじゃないのも、マジモンを避ける「マジモンセキュリティ」なんです。

避けはするんですけど、退治はしないで、マジモンが溜まってもいい場所も用意して。だけど開発が進む中で、いわゆる結果みたいなものが崩されて、マジモンが溢れちゃっているとユタさんは言います。ぶっ飛んだ話をしているようですが、開発への牽制なんですよ。

そんなシャーマンが居続ける沖縄って特殊ですよ。暮らしの中に「祈る」仕事の人がある。うにいて、その祈りを紐解くと、自然を守ることに通じています。そこから自然の中で人間が生きていく知恵を改めて知ることができるし、だから御嶽を守ることも、分水嶺から続く森とその流域にある集落を守ることに繋がっている。その根拠はまだ説明してないけど、そんな気がします。

最近おばあやおじいさんが言っていたことを思い出します。戒めとして、暮らしに近いところに国立公園があって、国立公園の山自体が祈りの対象で、祈るからこそ守られた自然もある。

今、やんばるで暮らす人々にとってこの場所の世界自然遺産以上の意味を、見いだそうとしています。そしてそれをどう伝えるか、模索する日々です。

※ 沖縄で伝承される海の彼方にある理想郷。神々や先祖がそこで暮らしている。



「空き家をホテルに変えて人が出入りすると庭の植物も生き生きしてくるんですよ」

さっている。そういう多様なニーズから、必ずこの「やんばる国立公園」にたどり着く人たちもいると思うんです。

私が育った辺土名なんて、この辺じゃ都会ですよ。半径50メートルの中に役場と家、銀行、郵便局、診療所がある生活でした。今は「やんばるホテル南浜森室」のある古い集落に家を建てようとしています。役員職員のとこ、集落の豊年祭を母と見に来たことがあるんです。アサギマー（祭祀を行う場所）に舞台が組まれて、月明かりの下、舞台だけがぼうつと明るくて。その上をコウモリがバサバサと飛んでいって。本当に幻想的で、美しかった。琉球の古典を奏でる三線も、華やかであり寂しくもあり、その音が集落に響き渡って、心震えました。

そのとき集落の人口は30人くらい。区長に聞

いたら今25人だそうで、こういう集落が一つずつなくなろうとしています。それで力技じゃないけど、まず自分が住んでみよう。そうしたいと突き動かされるものがあつたんですよ。ここに住みたい、住まなきゃ、みたいな気持ち。家族3人なので人口3人増えます。住んだら、次の扉が開くような気がします。

集落にいと、喜びを実感するんですよ。うりずんの季節、イタジイの森にポツポツとスポットライトを当てたように輝いて見えるライムイエローの花、その花の香り、夜に聞こえる波の音と風の音、それにここは家々がフクギに囲まれて、台風の時もバーベキューできる（笑）。集落の森に守られている感じです。そう、自分のご先祖様や土地の神様、そういった目に見えない存在も感じます。うまく言えないけど、守られている実感がある。今はその確信があるんですよ。

### 祈る人の姿に神の存在を感じ祈ることで自然を守ってきた

沖縄にはユタさん、神人さんといった祈りを司る方々、土地の神様との連絡係の人たちがいらっしやいます。そういう方々と一緒に、目に見えない存在を感じるツアーもやっています。それをやろうと思ったのも、集落にいとその実感が湧くし、確信があるから。そういう存在があるだろうなって思わせる説得力が集落にあるんです。地域に、ウングミヤシヌグといった「海御願山御願」（豊漁、豊作への祈願）がまだあつ



山を背にして海沿いの狭い平地に集落が点々とある。写真提供/やんばるホテル 南浜森室



東村のエコツーリズムの原点「慶佐次湾のヒルギ林」。

**東村のエコツーリズムは自然学校「やんばる自然塾」から**

**島袋** 「やんばる自然塾」は1999年に親父が始めまして。親父はホテルや旅行会社、いろいろな仕事をやって、最後は地域のために東村に帰ってきたんです。若い人たちに魅力のある産業を作りたい、もっと仕事の選択肢のあるエリアにしたいと地域のみなさんと考えて、観光をやってみたらどうかと。まあトライアンドエラーの1本目として始めた感じですかね。僕は逆行して都会に行きたかったんですけど笑。実は物心ついたところから、田舎があまり好きじゃなかったんですよ。新しいもの、現代風のものが好きで。とにかくここから離れたい、もっと都会のキラキラした世界に行きたいという感覚でした。それで建築の学校に行つて、都会の設計事務所に就職しました。都会いっても隣の名護ですが。

**渡久山・小田** 名護！（爆笑）。

**地域への思いを共有するガイドの声が、東村公認のガイド条例に**

**渡久山** やんばるのフィールドで一番お客さんが来るのがこの慶佐次なので、毎日誰かと会っている状態。東村観光推進協議会の活動より、ガイドの仕事でよく顔を合せています。ゴールデン

**島袋** 自然塾が忙しいとき、アルバイトみたいな形でガイドの仕事に関わるタイミングがあったんです。小さいころサトウキビ畑の溜池にはまって怖い思いをしたみたいな話を、おもてなしのつもりもなくしてたら、お客さんから「満足した、良かった」みたいな反応があつて。自分の感覚と反応のズレが衝撃で、この感覚ってなんだろう、もっとやってみたいって変わっていった感じですね。

**渡久山** 自分もガイドの仕事は「やんばる自然塾」に就職してからです。私と同一年の女の子、村出身の2つ年上の方の3名と一緒に新規採用されました。同年代のメンバーで船の準備しながらキャビキャビ楽しんでると、それを横目に裕也さんは、自分はステイボーイだからいな感じで名護に向けて車でブーっと。ちょっとおしゃべりな車に乗ってたよね（笑）。

**島袋** ステイボーイだからね（笑）。

**渡久山** 東村は、その「やんばる自然塾」でガイドだったメンバーがほとんど独立してショップが増えていった感じなので、みんな同業でライバルですけど、仲いいんですよ。川ですれ違うときも冗談言い合つて、ずっといい関係です。

**渡久山** それを1年でまとめて、その後役場に投げて、役場でも制定まで1年かかっている。島袋 なので、この東村ガイド条例は「応「見える化」」されているんですが、その前の見えてない1年同じテーブルで議論した時間と、それができた環境に僕は価値を感じています。

**渡久山** 「やんばる自然塾」に関わった人たち

ウィークに、カヌーが100艇ぐらいいてもいい感じで譲り合つて、お客さんに「前のグループが行くまで待たなくちゃいけない」って感じさせないようにできる。

**島袋** そこが僕は強く言いたい、この突出したストロングポイントだと思います。業者間のまつまりがいいっていうのが、この良さかな。

**渡久山** 協議会でもお互い言い分はあるんだけど、落としどころをちゃんと見つけようと建設的な議論ができるんです。いろんなことが割とサクサク決まっていくな。

**小田** それが普通なんですよ。

**島袋** ここにいとそうなっちゃあう。それで、みんなが集まって現場レベルで話を合わせて、役場にも意見出してもらつて、フィールド共通のルールを作りました。

**小田** 2023年、東村のガイド条例（※1）ができました。

**島袋** 東村長お墨付きのガイド条例です。最初はフィールドの今後に危機感を感じた現場が、「エコ部会」（※2）で話し合いをしたんです。やりたいことの意見やアイデア、よそのエリアではどうなってるんだらうって話をまとめて。

**渡久山** それを1年でまとめて、その後役場に投げて、役場でも制定まで1年かかっている。島袋 なので、この東村ガイド条例は「応「見える化」」されているんですが、その前の見えてない1年同じテーブルで議論した時間と、それができた環境に僕は価値を感じています。

**渡久山** 「やんばる自然塾」に関わった人たち



「ガイドの連携がいいのも、この宝」と島袋さん。



修学旅行などの子供たちも自然学習に訪れる。

が同じ思いを持って独立していく流れがあるので、根本的な考え方を共有しているところが大きいと思います。何か議論するときも、自分本位じゃなく地域全体を考えて、こっちのほうは正解に近いんじゃないかっていうところを、お互いに出し合える。

※1 東村公認ガイド利用推進条例。エコツアーガイドの資質向上、地域資源の保全などのため2023年に制定。  
※2 東村観光推進協議会の「エコツーリズム部会」。渡久山さん、島袋さんが所属する部会。

聞き書き

東村観光推進協議会（島袋裕也さん、渡久山真一さん、小田晃久さん）

## 地域への思いでつながるガイドが自らフィールドを守る「レンジャー」に



沖縄本島最大のマングローブ群落で国指定の天然記念物「慶佐次湾のヒルギ林」を中心に、東村ではエコツーリズムが発展しました。その活動を取りまとめているのが「NPO 法人東村観光推進協議会」です。2010年に特定非営利活動法人（NPO）となり、現在は観光、農業、漁業に関わる個人や団体のさまざまな会員が所属しています。今その中核を担うのは二世世代と呼ばれる40代のメンバー。冗談を交わしながら、地域への思いなどを語ってくれました。

おだ・あきひさ／1980年生まれ、愛知県蒲郡（がまごおり）市出身。東村観光推進協議会事務局長。初めての沖縄旅行で東村を訪れ、マングローブ林などに惹かれ2012年移住（写真左）。

しまぶくろ・ゆうや／1976年生まれ、沖縄県豊見城（とみぐすく）市出身。東村観光推進協議会理事、東村商工会理事。（有）やんばる自然塾の2代目代表取締役社長（写真中）。

とくやま・しんいち／1982年生まれ、沖縄県今帰仁（なきじん）村出身。東村観光推進協議会理事長。専門学校で観光を学び、東村でエコツアーガイドに。2010年（株）eco-adventureを設立（写真右）。



「みんなこの環境を守りたいと思っている」と渡久山さん。

### 「東村観光振興協議会」という組織

小田 東村観光推進協議会は、3つのツーリズムから成り立っているんです。鳥袋さん、渡久山さんが所属しているのは、「エコツーリズム部会」(エコ部会)。他に「グリーンツーリズム部会」(グリーン部会)。他に「グリーンツーリズム部会」が、農業体験を観光とか教育旅行のコンテンツにして提供して。もう一つが「ブルーツーリズム部会」で、海人の漁師さんが漁業体験を提供していたところ、今は休止中となっています。

僕が協議会の事務局として参加したのは2012年です。それ以前に友だちとの旅行で東村にマングロープを見に来ていました。それが初めての沖繩で、移住したい、北部がいいと思うようになって。自然とか地域で活動するところで職を探したら、東村観光推進協議会の職員募集を見たんです。連絡して、当時の理事長さんと結構話をして、応募したら、不採用だったんです。びっくりでした。それでも行く気満々だったので沖繩に来て、他のところで働いたけ



「ガイドの地位向上は地域活性につながる」と小田さん。

をしたという思いを、次世代、あるいは同世代の周りのメンバーにももつと波及させたい。慶次レンジャーに限らず、日々の業務の中でも社会貢献を意識したような仕事のやり方もきたらいいなと。そして、子供たちがこの仕事かっこいい、目指したいなところにつながりたいなと思っています。ガリのガイドも、ガイドっていう仕事に誇りを持っていて、しかも結構な稼ぎで、我々とは違う感覚を持っていたのに衝撃を受けたんです。生活の面でも思っている面でも、もうワンランク上げていきたい。

寄与すると思っているんで、一歩でも二歩でも高くしていきたい。農家民泊とか地元の方の生活に入り込むプランも作ってまして、その方たちの稼ぎも上げていきたい。ガイドさんって、このお二人もそうですが、お客さんの前でスイッチが入るんですよ。その瞬間ちょっと感動します。

鳥袋 自分の感覚や価値観を伝える、それで人の心を惹きつけるっていうのは、上辺だけでは、人の心は動かないと思うんですよ。この環境が楽しかったといってくるお客さんがいるとしたら、案内するガイド自身がいちばん楽しまないと。僕がいちばん楽しむつもりでやっています。それがスイッチになるんですかね(笑)。

渡久山 ここではカヤックの楽しさを体感してもらおうんですが、マングロープという本州になら自然についてちよこつと説明入れると、なにそれって興味に変わって、終わるころには「この自然ぜひ残し続けてください」って言うってもらえたりするんです。我々が思いを持って伝えたいからこそ、伝わった部分なかなって、自分の中ではやりがいとしてあります。ツアー後、汗まみれ泥まみれだけど「すごい楽しかった」って言うってもらえたりすると本当に毎回、やってよかったなって思いますね。やっぱりこの自然はすごい。

小田 このツアーでガイドと一緒にいくと、最後はみなさん共感して帰ってくる。心に響きたいな、本当に説明的じゃなく、なんか心に問いかけてみたい。そんな心が動くツアーを、みなさん提供されています。

わる機会が少なかったんですよ。それが、ガイドしている「慶次湾のヒルギ林(マングロープ林)」も、国立公園の一部になるって聞いて、環境省のみなさんは人数も少なくても多忙すぎるし、ガイドの自分たちならいつでも見回ることできるって話になったんです。ここを守っていくのは自分たちだろうと。

そのころ役場から先進地域視察の話もあって、オーストラリアのガリ(旧フレーザー島)に行ってきました。世界最大の砂でできた世界遺産の島で、リゾートホテルのガイドが島を守る活動をしているという話でした。実際はちよつと違って、ホテル敷地内は彼らガイドが守り、それ以外のエリアは環境省のような国の職員が守り、連携し合っていた。そんな話を現地のガイドさんと職員とレンジャーのみなさんから聞くことができて、なんか余計にこの地域に合うんじゃないかって。帰国してじっくり議論して、自分たちで「慶次レンジャー」を立ち上げました。

エコ部会で、思いのあるメンバーたちを中心に、レンジャー活動を始めました。そして、「我々は自分たちで慶次レンジャーを立ち上げ、活動します」と粘り強く環境省にお伝えし続けた。それで、やんばる国立公園の管理運営計画が作られる際に、慶次エリアは「慶次レンジャー」と連携してやっていく」という文言を入れてもらえたんです。公の文書に載るっていうので、すごい興奮しました。パトロールや周知イベントなど、環境省さんの要望に合わせて活動できるように取り組んで、今に至るところです。自分たちは、フィールドを活用して生活をし

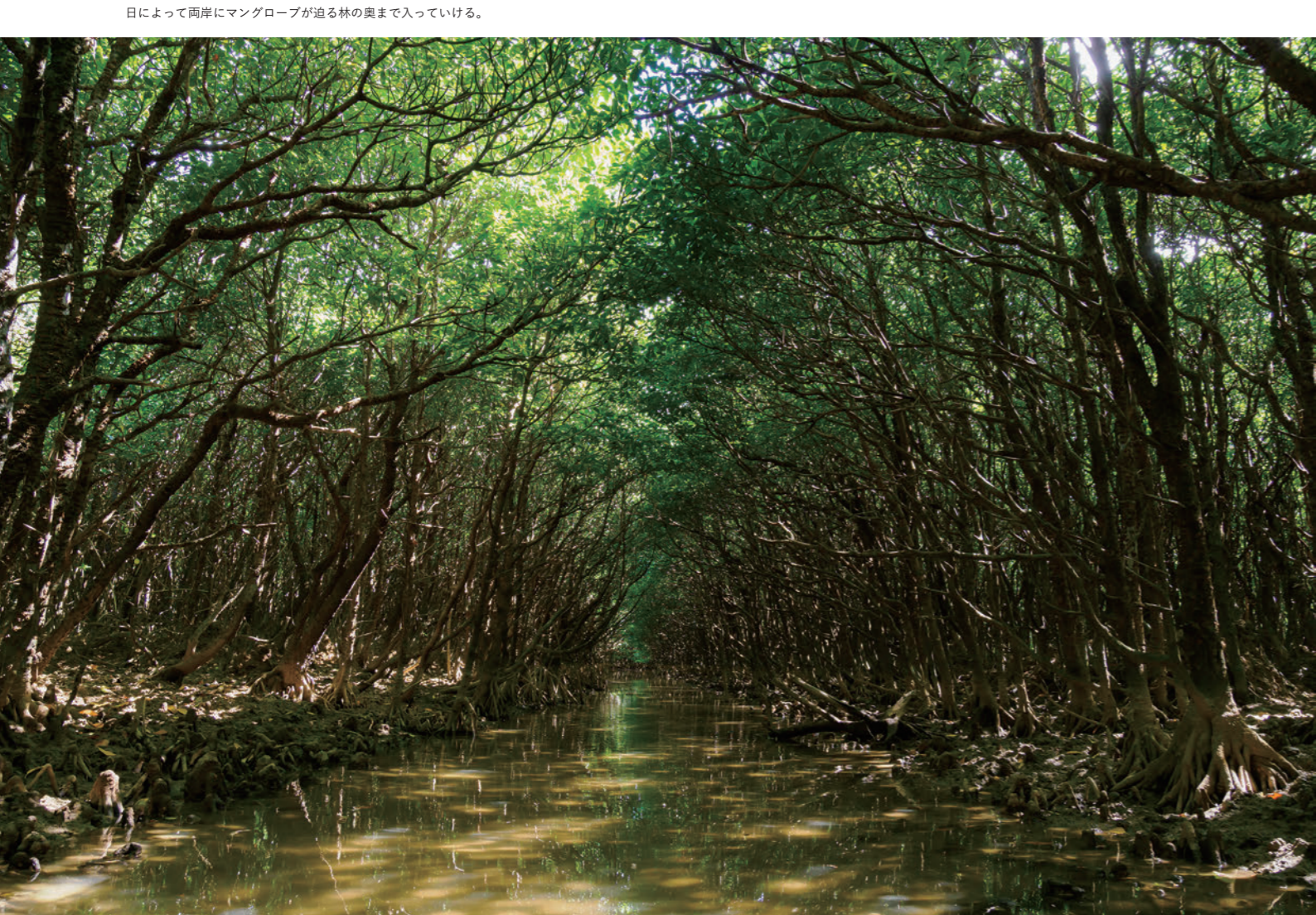
ています。そのフィールドを守る取り組みもしっかりやっていかないと、次の世代に渡すことができない。まだ、村で慶次レンジャーの認知がうまくいっていないのが課題なので、村のほうもしっかり説得しながら、もつと慶次レンジャーの存在と活動を知らせていきたいんです。今慶次レンジャーは20人ぐらいで、ツアーでお客さまを案内中に、外来種に気づいたら報告するのが一番の活動です。報酬はないけど負担なくやれると思うし、いずれは東村ガイド条例の認定ガイド制度に匹敵するぐらい、慶次レンジャーであることがこの地域のガイドの強みになる。きつとみんなが手を挙げてくれると期待しています。

### 東村の地域活性化にもつながるガイドの地位向上がミッション

鳥袋 エコツーリズム部会としては、社会貢献



慶次湾は生き物の宝庫。(上) トントンミーとも呼ばれるミナミトビハゼ(下) ヤエヤマシオマネキ。



日によって両岸にマングロープが迫る林の奥まで入っていきける。

聞き書き  
山川安雄さん

## やんばるの森を人の手で守りながら その豊かな恵みを地域で活かす



建設業と森林業に携わりながら、山川安雄さんは地域のためにさまざまな活動を続けてきました。国頭の森を歩く「森林ツアー」、密猟盗掘から森の生き物を守る「林道パトロール」活動などを仲間と立ち上げて実践。森の恵みが地域の暮らしや人々の心の豊かさにもつながっていくように、やんばるの森を守りながら活かし、活かしながら守る活動を続けています。

やまかわ・やすお／1958年生まれ、国頭村辺土名出身。一級建築士。大学卒業後、建設会社に勤務。30歳で国頭村に戻り父の有限会社山川組を継ぐ。地域づくりに尽力し、国頭村商工会青年部長、NPO法人国頭ツーリズム協会代表理事、国頭村森林組合筆頭理事など務める。現在国頭村議会議員2期目。



左は山川さんの同級生で林道パトロール発起人の一人、金城幸夫（きんじょうゆきお）さん。田嘉里（たかざと）共同売店ビジターセンターを運営。

### ポテンシャル高いやんばる 地域のため、なにができるか

親父は建設業で、おふくろが食料から日用品まで売る雑貨店をやっていました。小学校4年生ごろからよく店番して、中学からは親父の現場の手伝いをして建築のほうへ進みましたね。

それでなんでこういう活動をやるの？って聞かれるわけですが、これも4年生のとき、青少年赤十字のリーダー研修会で辺土名高校の生徒から「世のため、人のため、国家のために尽くすことを誓います」という言葉を教わったんです。それがずっと胸にあって、就職して那覇の建設会社にいたときも、建築を通して世のため人のため、なにかできないかなと考えてい

た。今もその思いがベースにあります。

親父の体調もあって30歳のとき、国頭村へ帰ってきました。当時に起きてたかっという、海沿いに100メートルぐらい車列ができて、熱帯魚が堂々と盗まれていたんです。すごかったですよ。それより前、子供のころは森からツバキやツツジの木が取られたり、川の大きな石が取られたり、そういうのが見つかって交番の前で降ろされてるのよく見ました。

自然に関わりはじめたのは1997年。当時、僕は商工会青年部の部長でした。春になるとやんばるの亜熱帯照葉樹林の新緑がすごい輝きを増すので、それをなにか利用できないかという話が、商工会のメンバーから出て、役場で森林に詳しい職員、森林組合の若い人たちが、商工会の我々のチームで森の下見に行つたんです。そのとき、それは見事な森だつていうのに気づいて。というか、みんなびびくりした。

帰ってきてオリオンビールを飲みながら振り返りをしたら、出てきた言葉が「この森は人を入れすぎたらダメだ」。人が入りすぎたら下草が剥がれるエロージョンが起きるわけです。地元の人、人を入れすぎるのは嫌だと。人間がコントロールしないとダメだ、という言葉まで出た。

そのとき、国頭の人っていうのは、保全する気持ちがあるとも体染み込んでるんだなというのを感じました。最初はバスターやろうぞとか言ってたんだけどね。そもそも森の中にマイクロバス入れないよ（笑）。その夏の「国頭村まつり」で、森や沢を歩く



地元の人たちと制作した『輝くやんばるの森』（2008年発行）。

ツアーを4コース作って、200名の定員で募集しました。新聞に小さな見出しで載せて、ひと月前の朝10時に受付を開始したら、その日の15時までに全部埋まったんですよ。やんばるの森にこんなにも興味ある人がいるんだって初めて知った瞬間でした。山に詳しい人など60名のボランティアスタッフがやつたら、人気があること。まだガイドが一人もない時代で、エコツーリズムという言葉がちょっとあったかな。6年間やりました。

下見したとき、すごい場所も見つけたのよ。ヒカゲヘゴの大群落があったり、琉球藍染の藍壺がある開墾跡があったり。でも地元の人がオツケーしない間は触ってはいけない。そういうところは守らんといかんしね。沢歩きのコースは野生のランの仲間エビネが減つたのがわかって、このコースは3年でやめた。自分たちの欲張りややってはいけない。



森の神様にパトロールの安全を祈り、夜の林道へ。

そのころ西表島で最初のエコツーリズム協会ができ、99年に東村で2つ目できた。国頭は協会作らないのかって聞かれて、器を作るよりも人を作るのが先だとカッコよく言っちゃって（笑）。当時、エコが「エゴ」になりかけてる感があった。僕らはそうじゃないと、エコを外して「ツーリズム協会」にした。沖縄の方言で人のことを「チュー」って言うわけ、ウチナンチューね。だから「チュー」リズムのイメージで、人を作る協会だと、「国頭ツーリズム協会」を2004年に作りました。

『輝くやんばるの森』っていう冊子も制作しました。ずっと前から「やんばるはポテンシャルが高い」って言われてたんだけど、地元の人たちはよくわかってないところがあったんですよ。そのポテンシャルとはなにかをまとめたのが『輝くやんばるの森』です。奄美大島で作られていた冊子を見て、これだと思って。それを当時の環境省

那覇自然環境事務所の中島慶二所長のところに持って行って、これぐらいのものを作ろうよって言った。コンサルも入れず地元の人たちだけで、26回の会議を重ねて2008年に発行しました。中島所長が最初の挨拶で書いているけども、昔は「やんばる」って、いい意味で言われることは少なかったんです。沖縄では、田舎の人とか、山しかないとか、そういうのが多かったんだが、このころから多種多様でここだけの自然がある、プラスのイメージに変わっていったと思う。

## 林道パトロールの活動とやんばるリンクス

20年くらい前、陸でも密猟盗掘があると聞くようになった。それから環境省とパトロールしようよって話になり、CCY（やんばる国頭の



落ちていた木の葉などから、どんな生き物がいたかわかる。

森を守り活かす連絡協議会」という団体で環境省から受託して、林道パトロールをやることになりました。15、16年前かな。今は「やんばるリンクス」というチームになって、国頭村、大宜味村、東村の7つの集落で3名ずつ、21名のメンバーがいます。

林道パトロールは、いろんなことがありますよ。腕章して車にステッカー貼って、3名でパトロールしてたら、一番生き物が出る場所に20代の女の子が一人、軽自動車ですって来た。「おじさんどこに行ったらオキナワマルバネクワガタとれるの」って。「おじさんたちは、あなたのようなのがいるからパトロールしてるんだよ」と言ったら、「こんな大きな森から私がつぐらいつたってどうってことないでしょう。本当はヤンバルテナゴガネが欲しいんだ」って言ってきたわけさ。本当に好きだったかも知らんけどね。同じ日に2人の男を森の中で見つけた。明らかに採取箱を持っていて、僕らが近づこうとしたら一目散に逃げていった。

木の上に精巧なLEDライトのトラップが300メートルごとに取り付けられていたこともあった。夜見つけて、朝に釣り竿で外して環境省に届けたよ。ライトトラップは今でもある。有名な大学の学生が、強烈なライトを浴びせて虫を集めてたこともあった。やっていけない場所だよって言うっても、あ、そうなんですかってライトを消そうともしなかった。

それでも、地域の人たちがパトロールしているところに僕は意味があると思う。地域の宝物を無断で持ち出すなよということですよ。地元のコンビニの夜勤の人から、夜12時ぐらいに「小包の箱

めて、この地に根付いてきたと思いますよ。森林組合のみなさんが、木を切って植えて育てるだけじゃなくて、地域の林道をパトロールして密猟や不法投棄を防止したり、外来種を駆除したり、そういうことも森林組合の人たちが生業として、今やっている。以前、写真家の先輩と林業者の仕事の幅を広げようという話をして、たんだけども、つながったと思う。

国立公園になる前、地元は地元で未来を描こうと、守るところ、残すところ、再生するところ、活かすところという四つのゾーンを作ったんですね、国頭村の森林ゾーニングっていうんです。そのとき27名のメンバーで、林業、一次産業、観光の3チームに分かれて、各々一生懸命いろんな議論をした。僕も林業チームに入って、我々は国立公園になっても木を切らないという選択肢はないですよということをお話した。ルールの中で切れるところは切りますよ。その中で「やんばる型林業」が生まれたわけです。そして今も「やんばる型林業」に則っている。これも「守りながら活かし、活かしながら守る」につながると思います。

当時は、国立公園になったら……とたくさん勉強会をしたんですよ。今も僕は議員として議会の中で、林業において我々はちゃんとルールの中でルールを守って切りますよと言っている。あるとき、研究者の方から伐採計画のあるところにオキナワトゲネズミ（ケナガネズミより希少）がいるから、今は待ってくれないかという相談を受けました。地図に大きな円をプロットして、このエリアを切らないでと。その大きな

円を役場も森林組合も了解して、触らなかつた。そういう協力をちゃんとやっているし「やんばる型林業」でも謳っている。ノグチゲラの繁殖期は全然切らないし、そんな森林組合は全国でも国頭だけだと思いますよ。保護団体でもあると思う。他県で森林関係者に、環境省とちゃんと話し合いをしながらやれば、新しい仕事も生まれるよって言ったら驚いてた。しかし保全のみ、守るだけでは難しい。

林道パトロールと一緒に始めた同級生の金城幸夫くんが、田嘉里共同売店ビジターセンターをやっている、そこで2人で結構話をします。保全と活かすことがつながっているのを、ちゃんと形にしたい。それで地域の人だけじゃなく、観光客にも保全に協力してもらって、やんばるのファンになってもらおうと、保全体験ツアー「AKISAMIYO（アキサミヨ）」を作りました。実際にGPSを持って、生き物や不審車両の記録も取って、やんばるリンクスの活動と同じことをやります。

最初に「生き物観察ツアーじゃない、林道パトロールの体験ツアーですよ。だから生き物が見れないこともありますよ」と伝えます。それでもみなさん結構ワクワクして、一生懸命生き物を見つけようと楽しそうです。後継者も育てていきます。地元の子供たちやここに住む「土の人」、そして外から来た人や移住者、関係人口も含めた「風の人」と。優秀で素直な風の人たちが増えてますよ。いろいろ地域づくりをやってきたけど、林道パトロールというのは、やんばるの豊かさを僕ら地域の人に改めて教えてくれたものだと思う。



やんばる固有種のおキナワミナミサワガニ。



やんばる固有種のカゲモドキ幼体。2024年に新種記載された、県の天然記念物。

からガサガサ音がする」という電話もあった。見に行きましたよ。翌日、配送会社と環境省、警察の立ち会いで箱を開けたら、中身はオオヤドカリでした。空港だと摘発されるから、宅配便を使っただんだね。地域の人たちには、もし何か気づいたことがあったら「やんばるリンクス」に連絡してねって言うっている。それが抑止力になっています。また、ケナガネズミっていう森の中で生活する大きなネズミが、辺戸集落の軒裏にいたことがあった。ネズミとりもちにかかってバタバタしていると連絡があり、すぐ「NPO法人どうぶつたちの病院沖縄」の長嶺先生に電話入れて保護してもらった。2ヶ月後に治療を終えたケナガネズミを放獣して、それを地域の子供たちやデイサービスのお年寄りに見せたんです。胴体30センチ、尻尾が30センチのケナガネズミですよ。自分たちの住むところに、本当にこんな希少な生き物たちがいるんだって、みなさん初めて目の当たりにしたわけです。

林道パトロールには子供たちも連れていきますよ。小学校を卒業するまでヤンバルクイナを3回見た子もいる。ゴミを不法投棄しているの

も見せました。その子供たちが家に帰って、家族に話をするわけ、あそこにゴミがポイ捨てされてるよって。その後、本当にポイ捨てが1週間か10日で止まったよ。子供たちの力っていうのは本当に大きいなと思いました。僕の中でもすごく大きなことだったね。パトロール隊が各集落にいても、普及啓発につながっている。自分たちで寝るのもおかしいけど、いい活動ですよ。環境省との関係性もね。「やんばるリンクス」の名付け親は当時の環境省のレンジャーだったんだけど、「リンクス」と付けた背景には、3村が一つになって保全活動をして、地域の人の自信と誇りにつながるよという思いがあった。それもすごくいいなと思います。

## 守りながら活かし活かしながら守る

「森林の持つすべての恵みを、人と生き物が持続的に享受する」という意味で、国頭村が作った「森林業」という造語があります。行政を含



「森林業」の概念のもと、守り活かされているやんばるの森。

聞き書き  
湧川ツヤ子さん

## 五穀豊穰の祈り「塩屋湾のウンガミ」

### その祭祀を司る神人の軌跡



まるで鏡面のような塩屋湾の海。



大宜味村の塩屋湾は、やんばる国立公園の中でも風光明媚な場所。湾の入口にかかる塩屋大橋から眺めれば、心も晴れるようです。ここで毎年行われているのが、「塩屋湾のウンガミ（海神祭）」です。400年以上続く地域の豊作豊漁を祈願する祭祀で、国の重要無形民俗文化財にも指定されています。塩屋の湧川ツヤさんは、ウンガミで海の神を務めるなど重要な役割を担う神人です。神人のこと、ウンガミのことなどお話を伺いました。

わくわく・つやこ／1945年生まれ、大宜味村塩屋出身。塩屋地区の神人で、15歳で神人であることを自覚。塩屋から田港（たみなと）へ移り、就職して名護へ。20代で起業、結婚・子育てなどを経て、40代で正式に神人となるため塩屋に帰郷。現在、地域の神人を代表する「ノロ（ヌル）」が不在の中、ウンガミなどの祭祀を取りまとめている。

### 15歳のとき、伯母の後継として「神人」を自覚

塩屋に生まれて、いたのは3歳まで。お父さんが再婚して隣の田港に連れられていった。両親は塩屋の人。育ての親は田港。だけどこの辺の部落の行事はみんな一つ、ウンガミね。

自分が神人になるのは、15歳くらいでわかったのよ。体が痛くなってきた、だけど病院に行っても異常なし。注射なんかやったら腫れる。筋肉が痙攣したことが2回あったよ。救急に運ばれて、もうあと5分で死によったって言われたこともあった。

自分でもわかる。（痛みは神人になる）前触れで病気になる。お父さんの女のきょうだいはみんな神人だったんだ。長女、次女、三女、お母さんも。神人は門中（もんちゆう）から出るのよ。

父方の親戚ね。お父さんのお姉さん（長女で伯母）が亡くなって、夢に出てきた。ウンガミの真っ白い衣装だよ。それで自分はその伯母さんの跡継ぎだと思った。

神人は（正式に）なるまでが大変。私の場合は、伯母さんがやったものをそのまま継いだけど、普通は亡くなったらウンガミでやるべき役割が消える。みんな役割が違うんだ。他の部落と全然違うわけよ。

門中の部落で1年に1回行事があるんだよ。そのとき自分は神人になるって報告をする。自分勝手なことできないのよ。親戚みんなに報告して、神様のところに行ってお願ひして、時間かかるのよ。

ウンガミの衣装もみんな1日で作るの。1日で仕上げないといかんわけだから大変なの。昔は2、3着作る人もいたよ。衣装も違うのよ。カゴに乗る神人はだいたい3つ使う。私なんか2つだけ。だからお金もかかるし子供たちも小さいと、（神人になる）判断難しいんだよね。親が子供たちにさせないことも多いよ。いなくなったり、精神がおかしくなったり、おうちを失ったりするの。本当に神人は大変だよ。

子供たちに手もかからなくなって、お金も大丈夫になって、家族で話し合って、40過ぎてからようやく門中に報告したんですよ。「お願ひします。（神人として）立つからよろしくお願ひします」って。

### 自分で道を開き、正式な神人へ

（神人として）生まれるときもまた大変。女だけで24時間、夜も眠らないで朝まで踊ったりするわけ。その準備で門中に相談に行って、（ヌルの）山城トヨさんにお願ひして、部落の婦人会も全部お願ひしないといけない。私のときは何十年ぶりだったからさかかったんだよ、もうびつくりき、婦人会が全員出たよ。ご馳走も作らんと。衣装の用意も、昔は門中でしたけど、今は全部自分でお金出すのよ。信じる人が少なくなって、だから大変だね。白い生地も昔は本物の喜如嘉芭蕉布（きよかばせうふ）だったわけ。何十万だよ、あんなの偽物でしかないよ。だからもう誰も（神人に）立ちきれない。

私は自分で道を開いてきた。自分で屋占（やうぢ）白浜と部落を拝んで歩いたよ。拝むと良くなるのよ、病気が健康になるわけ。自分の門中も拝みに行くともんな元気になるのよ。ああ、自分は神人だと思った。だから、時が来たらやりますって、いつも門中に報告してた。いろいろな経験したよ。神人になって30年近い。塩屋大橋（1999年完成）と一緒だからね。

45歳で神人を始めた。巳年で、次女の長男が生まれた年だった。大変だったけど、自分も元気になるからよ。神人をやるまでは、化粧もできなかった。前は首も見せられなかったよ、あせぼみたにくっついて。朝も昼も夜も、死んだ人がくっついてくるのよ。パチパチパチパチと。新聞読むと新聞からも霊が付きよったよ。死者が自然に出てくる。お祓いしたら、また治

るわけ。神人になったら、体もだんだん強くなった。でもたまに幽霊が引つ張るわけ。それで、私あんたを助けられない、お願ひどいて言っただかすわけよ。那覇でも歩いてると戦争の跡とかで引つ張る。すまんけど、私はあんたをどこに帰していいかわからんから、早く家族を探してくださいって。幽霊もどこにいたらいいかわからないの。助けていけど、私もできないからごめんね、家族に知らせようだといしか言えないよ。本当にかわいそう。8月は、帰らない幽霊がいるの。人の家の中に入ってくるんだよ。マジムンとかヒーダマ（※2）とか。今はもう整理してるから少なくなってるね。昔はいっぱいだったよ。8月になれば、あっちこっちにゴロゴロだったのよ。

ウンガミ前は、トヨさんがくっついてきたよ。105歳で亡くなった山城トヨさん、一番上のヌル（ノロ）だった先輩。12歳からやってたはず。



大宜味村観光協会も、この部落でツアーやプログラムを行う際は、よそ者としてお邪魔させていただき気持ちを忘れず、まずツヤさんにご挨拶し、これからの内容をご報告したうえで、けがなく無事に終わられるよう御願（うがみ）参りを一緒にいただいております。（大宜味村観光協会会長兼事務局長 大崎史丸さん）



毎年旧盆明けの初亥の日に行われる「塩屋湾のウングミ（海神祭）」。1年交代で御願年（ウグアンマール）と踊り年（ウドイマール）がある。大宜味村ではウングミ、国頭村ではウングジャミと呼ばれる。（写真上）アサギ（折りの場）での神事。左から2人目、白い衣装の方が湧川さん。（中）御願ハーリー（フアーリー）。男性が漕ぐハーリー船を対岸で女性が腰まで海に浸かり迎える。（下）到着した船の中央に竜宮神として運ばれた湧川さんの姿がある（2025年の様子）。写真提供/大宜味村観光協会

沖縄県から認定された証書もあったよ。それで「おいトヨさん、ウングミだけどね、私腰が痛くて大変よ。あんたが治してくれないよ」と言ったら、きれいに治った。

感じ取れるのよ、体がおかしいなあと思ったら誰かがくつついてる。医者には治せないけど押んだら治るわけ。トヨさんも私に家のことで言いたいことがあつて来たのよ。それに応えたら「ありがとう」って言ってくれた。明日ウングミなんだけどって言うたら、それから何もつかない。腰も痛くない。トヨさんが助けてくれた。今日も午前中はトヨさんに「ありがとうね」って拝みました。一番上の神様だった、何でも相談してた人。

拝みもみんな時間をかけてやります。別の仏教を信じたら終わりなのよ。信じたら祖先神はつかない、逃げる。悪いものに負ける。春と秋の季節の移り変わりのときは嫌なものが入って

くる。怖くはないよ。かわいそうだねとしか思わない。そういうもん。自分はそういう生まれだから。

※2 マジモンは沖縄で悪霊や妖怪の総称。幽霊も含まれる。ヒードマはヒトダマのこと。

### 祖先を拜んで、家族を大切に

遠いところから、運勢、縁談を見てって人がくるよ。子供がうつだという人も来るけど、なんか間違えてる。まず自分の周囲の祖先を拜み、門中の祖先を拜みなさい。なんで遠いところから来て、人の拜所で拜むの。自分の住む所の神様と祖先が大事さ。

治る、治らない、友だちだったらはつきり言うよ。あんた来るの遅いね、なんで早く来ないのって。でも私のところ来ると元気になるよ。

みんな並んで拜んで、杯さかづきしてから餅をもらう。今年おいで、餅のときが一番いい。

※3 ハミウスイともいう。山の神に拜み、海の恵みと山の恵みをつなぐに感謝する。

### 塩屋の海が世界で一番いい

塩屋は祈りが多いのよ。米だつたら米、麦だつたら麦、粟だつたら粟の豊作のお祈りの行事が毎月2回くらいあって、沖縄では一番多いの。私がやるのよ。（部落の人から）今月は何の豊作だからよろしくお願いします、ありがとうって。部落でやらなくても、おうちでやらなくても、私がやっているから安心なの。だから私ここにいるわけ。自分も健康になるし、部落も良くなるし、呼ばれてるの。

こっちはよ、海がすごいんですよ。拜んだらいいもの、拜まないと悪魔になる。私なんか好



塩屋集落にある拜所の前で。

急がないでいい、真心からやればいい。おじいおばあにパワーももらったら大丈夫なのよ。何でも心からやるということ。悩み事も、お願い、力になって言えれば絶対なってくれる。パワーももらえるよ。真心からやってくるかやらないか、信じるか。これが大事だね。

朝は東向いておはようございます、今日もまた1日よろしくお祈りしますねって、夜はおやすみ、また明日ねって言ってごらん。神様に自然に言えるようになる。生かしてくれて、あり

40代50代は病氣ない。まず祖先を拜むことだ。人の病氣を治すときは、その人の祖先の墓に行ってケンカするの。あんたたちね、長男の子供になんにもしてくれてない、これでいいの？って。後悔してるはず、今から助けてくれない？ 医者とはダメと言うけど、本人は死にたくないって言ってる。治してくれない？って。で、治ったの。今元気で働いてる。本当なんだ。

海を渡るのも前は馬だったんですよ。馬が暴れるんで、鳥に見立てたハーリー（船）になった。私は竜宮神だから、大きい船に乗る。40名の漕ぎ手がいて、昔は権の動きがそろってきれいだったよ。羽のように上がって、漕いで、また上がる。本当に鳥のようだった。私は船に乗らないといけないけど、カゴに乗る神人もいるわけさ。歩く神人もいたの。神人ごとに役割がある。だいたい朝10時から始まって夕方4時に終わる。この日はもう1日体力仕事。

第一に目の前からやらんと。自分と家族を大事にしたら、次に人のこともできるさね。門中とか上に行くわけさ。階段を上っていけばいいのよ。私なんか何でも家族よ、それが一番いいさ。時代は変わっても大事。今は親は親、自分は自分、これだけ結婚しないのは愛情不足。いつの時代も家族はしっかりとまっとかんとき。

### 400年前から続く「塩屋湾のウングミ」

ウングミをやるのは、前は塩屋、屋古、田港、白浜の4部落だったけど、今は押川、大保、江州えすが増えて7部落。後からできた部落ね。この7部落の1年間の健康安全祈願と、豊作の何もかものお祈りなのよ。（ハーリーの）大会というより、なるべく安全に、神様を届けるものです。

前は神人が言うように歩いて、夜も歩いて、順序も時間の縛りもなかった。昔の方は偉いよ、ずっと歩いてさ。そのころはハーリーだけだったけど、今は相撲もあつて祭りになった。男の楽しみよ。古手利鳥こてりじまに向かって拝みもする。あつちが女、こっちは男。ヒートウー獲るまねもするわけ。イルカのことよ。昔は獲って食べたけど、今は獲るまねさ。

トヨさんが亡くなって今はヌルがいらないから、何十年ウングミやっても全体で何をやってるか、みんなわからないわけ。自分の役割だけで意味がわからないのが多い、なーなーよ。神ウスイ（※3）の行事も、拝みもみんな私に聞くよ、誰から頭を下げるかとか。私なんか集中するから、線香の煙を見てたら（ご先祖さまが）上から降りてくるのが見えるのよ。真心からやるから（わかる）。



穏やかな塩屋湾の夕景。

聞き書き  
長嶺隆さん

## ヤンバルクイナはやんばるの森だけに 生きる沖縄と世界の宝



鳥好きの少年として周囲に知られていた長嶺隆さんは、発見されたばかりのヤンバルクイナと国頭村安田の森で出会ったことをきっかけに、獣医師の道へと進みました。埼玉の動物病院でたくさんのイヌやネコを治療し、ペットの存在の大きさを痛感して、沖縄へ帰郷。待っていたのは、やんばるの森に捨てられたネコが、ヤンバルクイナを襲っているという現実でした。

ながみね・たかし／1963年生まれ、沖縄県具志川市（現うるま市）出身。獣医師。高校時代に野鳥研究会を発足。ヤンバルクイナに魅了され獣医師を志し、日本大学生物資源科学部獣医学科へ進学。関東の動物病院勤務を経て沖縄に帰郷、2001年うるま市で「ながみねどうぶつクリニック」を開院。NPO法人「どうぶつたちの病院 沖縄」理事長も務め、ヤンバルクイナをはじめ沖縄の野生動物の保護活動に尽力している。

### 鳥好きのおじさんたちに導かれ 干潟に通った少年時代

生まれは具志川市で、やんばるのよりちよつと都会だけど、昔は信号もない集落でした。うちは農家で、幼稚園のころ、親父に「遊園地行くよ」って畑に連れて行かれました。それで農作業は嫌いになったけど、生き物との距離が近かったんです。あるとき畑で、長靴の上にウグイスがビョンと乗ってきて、その軽さが衝撃で鳥に興味を持ちました。

中学生のとき、友だちが弱ったハトを持ってきました。みんな僕が鳥好きって知ってるから持ってくるんですよ。緑色のリュウキュウズアカアオバトでした。うんちに虫がいてまずいと思いい、野鳥の会の会長さんが那覇にいるのを新聞で知ってたから、電話帳で調べて相談しました。会長さんを通じて、具志川の野鳥の会の人ハトを引き取りに来てくれました。どんなケアをしたのか知りませんが元気がなくなって、一緒

に山で放したらちゃんと飛んでいきましたよ。

それから鳥を見に行こうと誘われて、近くの干潟に行くようになりました。いい年のおじさんたちがあの鳥はあれだこれだと種類を識別しておもしろかったですね。やんばるにも連れて行ってくれた。当時は伐採が激しく赤土がむき出しで、やんばるといえば「赤」でした。そこにヤンバルクイナもアカヒゲもいたんですよ。高校生になると、もう毎日干潟にいましたよ。ある大潮で満潮の日の夕暮れ、絶対に微動だにしないと決めて、流木に腰掛けました。徐々に潮が満ちてきて、波に浮かぶ鳥たちがどんどん僕のほうへ寄ってきた。足首まで水が来たとき、何千羽もの小さなシギやチドリたちに周りを埋め尽くされました。

流木と一体化した僕の足元で、鳥たちは頭を背中に入れて安心しきって寝てる。いよいよ満ちたそのとき、すべての鳥がバアツと飛び立ちました。僕が追い出したわけじゃなく、彼らが決めて一斉に飛んでいった。もうその瞬間はな

んと言ったらいいでしょう。こんな幸せがあるか？ですよ。鳥好きの先輩たちに感謝しました。それなのに、鳥たちが毎年数千キロを渡ってくるこの干潟が、埋め立てられるという。「干潟を埋め立てないで」と県知事をお願いに行きました。しかし、埋め立ては止まらない。このとき、沖繩が嫌いになりました。

傷心の僕は鳥見の旅に出ました。高校2年生、行き先は与那国島です。ある日、早朝から夜まで島中を鳥の観察に駆け回り、夜、大雨の中テントで爆睡。朝目覚めたら首から下は、寝袋ごとびしょり水に浸かってた。とりあえず替えて売店に駆け込み、おばあちゃんにカッブラーメンにお湯を入れてとお願いました。それが10分経つても出てこない。やっと出てきたと思ったら蓋が開いてる。お腹を空かせた少年は腹立ってたわけ。でもその中を見たら、野菜や卵を炒めたのが山盛り載ってたんですよ。初めて会った少年にですよ。おばあちゃんありがとう、そしてごめんさいって、涙が出ました。

### ヤンバルクイナ発見から 人生が動き始めた

高校3年間、野鳥観察に没頭した僕は、案の定大学受験に失敗して浪人となりました。受験勉強に集中するため、勉強机の正面の壁に「禁書」と書いた紙を貼って、鳥見を封印。その同じ1981年、ヤンバルクイナが発見された。気がついたら、友だちとやんばるの森にいました。ヤンバルクイナを見た人がいると聞いた川辺



安田くいなふれあい公園にあるヤンバルクイナ生態展示学習施設 クイナの森。

で、奇跡的にすぐ見ることができました。霧が立ち込めた夜明け、向こう岸にヤンバルクイナが現れて、何かをついばんで、消えていった……。その間数十秒、全てがスローモーションでした。

家に帰ってもぼうっとしていたら、姉が「お前は本当にしようがない、獣医にでもなったら」と。ハッとしましたね。獣医にでもなったらと思っただけで、何かをしようかな。今度はしっかりと勉強し、神奈川県藤沢市にある日大の獣医学科へ行きました。卒業後はペットを診る埼玉の動物病院に勤務。最初は動物に服着せるの変だよと思ったけど、治療していくうち、どれほどの人が動物に癒されているかと感動に変わりました。人間にとって人間以外の家族がいかに大切か。これから動物の力がもっと重要になる。

38歳のとき沖縄に帰ると、サトウキビ畑にイ



環境省ヤンバルクイナ飼育・繁殖施設（非公開）。70羽以上のヤンバルクイナが飼育されている。



研究員の玉那覇彰子さん（中）と飼育員の中田創士さん（左）、上間勝吾さん（右）。

## 安田の人々との出会い

その担当官が最初に案内してくれたのが安田の集落、偶然にも初めてヤンバルクイナを見た場所でした。回覧板を見たら、ネコがヤンバルクイナを食べるから室内飼いでほしいとある。当時の沖縄で室内飼いでありえない、おもしろい集落だと思いましたね。さらに他の地域ではヤンバルクイナが減っているのに安田にはたくさんいた。愛でて、大切にしていたんです。

区長さんにネコの避妊手術をしないと相談したらすぐOKが出て、公民館に手術室を作ることになりました。準備の会議で、獣医の間で話題だったマイクロチップの話もしたら、集落の若い連中が、そんな良いものがあるなら使おう、制度化しよう。マイクロチップで迷子札なんです。皮膚の下に埋め込むから手術で取らない限り消えない、逆に捨てることもできない。みなさんネコを捨てない覚悟をしたんです。

2002年、安田集落がマイクロチップによるネコの登録制度を初めて明文化しました。この田舎の集落が先進的なことをやったのは、本当に困っていたからです。この森は街の人がイヌやネコを捨てに来る場所で、街の大人たちが自分の子供の前ではしないことを、集落の子供たちの前でやっていたんです。ヤンバルクイナ絶滅の危機は沖縄県民が作っていました。

さらに都会で買った飲み物を持ってきて、地元共同売店では買わず、ビーチでバーベキューをしてゴミを捨てていく。そのゴミを安田の人と拾っているとき、迷惑だからビーチの入口を

封鎖して車を入れないようにしようと思案しました。すると、「この海は俺たちの海じゃない。みんなの海だから来てもいいんだよ。ただ、イヌやネコ、ゴミは捨ててほしくないね。そう言いながら子供たちとゴミを拾うんです。安田の人たちの寛容さ、神様かと思いましたよ。ネコの避妊手術や適正飼育にルールを作るのも安田の人にとっては当たり前で、まず自分たちがちゃんとしようってことだったんです。イヌやネコをやるんばるに捨てに来る街の人々のせいでもた沖繩が嫌になりかけていたけど、安田のみなさんのおかげで、改めて好きになれました。ヤンバルクイナが存続しているのは、この人たちがいたからだと思う。」

## ヤンバルクイナを守る理由

理系で学んできた僕には、いつの間にか守ることも科学的な理由が必要になっていました。生物多様性とか医薬品の可能性とか、大切な概念でしょう。だから活動を始めてすぐ集落の人に、ヤンバルクイナがどれほど大切か語っていた。なぜなら、今はわからないけど、あの真っ赤な嘴や、僕が知る鳥の中で一番臭いうちのの中に、もしかしたら人を救う何かがあるかもしれない。薬になる可能性があるかもしれない。子供たちの未来を考えたら、私たちに鳥を絶滅させる権利はない。

集落の人たちはもって純粋でした。飲み会で隣のじいさんが僕に「ソコソコ言うんですよ。『うちの庭は朝も夕方毎日ヤンバルクイナが

じいさんたちは、きれい、かわいい、だから守ると言う。それでいいじゃないですか。おかげで今は僕も、子供のときのようにきれい、かわいいと普通に言えるようになりました。」

それでもやるんばる全体では、ヤンバルクイナはどんどん数を減らしていました。沖縄の責任だけではとても間に合わない、世界に助けを求めようと2005年アメリカへ行き、国際自然保護連合（IUCN）に相談しました。彼らはヤンバルクイナを知らなかったけど、これはまずいと日本で国際会議を開くことになったんです。会場は安田の公民館にして、日程も勝手に決めて帰ってきました。国際会議をやるつもりなら「いくら何でも相談しろよ」とじいさんたちに叱られましたね。それでも「じゃあやるよって力を貸してくれた。200人の集落に国内外から80名の専門家が来て、食事は婦人会のみなさんが大活躍でした。」

その国際会議でヤンバルクイナの存続について科学的な分析が行われ、15年後の2021年に絶滅の可能性と出た。予想はしていたけどもショックは大きかった。だけど、そこでみんなが一つになれたんですね。集落も、環境省も、僕たちNPOも。それぞれの持ち場で頑張ろう、とにかくできることはすべてやろうと。

安田で場所を提供してもらい、ヤンバルクイナ救命救急センターが誕生しました。こういったことを引き受けてくれたのが安田です。ノネコが減ったのも安田がいち早く動いたから。安田で制度化した翌年の2003〜4年、やんばる3村で500匹のネコにマイクロチップを入



ヤンバルクイナ生態展示学習施設内、観察ブースのクー太。人目を気にせず姿を見せる。

来る。集落にたくさんいるけれども、うちに来る子が実は一番かわいい。それが反対隣にいたじいさんにも聞こえて、「いやそれは違う。うちの庭に来るのが一番きれいだ」って、ケンカするわけ。さらに「来週孫が那覇から来るから見せるんだ。こんなきれいでかわいい鳥を将来に残さないでどうする」って、今度は怒る。しかもこの人たちはお隣同士だから、恐らく同じクイナなんですすよ！

それは言えず、この場面でもう僕は涙を流すしかなかったです。こんな人たちに、僕はクイナを守ることは世界的意義があるとか、結局人間の役に立つかどうかの話をしていいたんです。



診療中、指を噛むほど元気なヤンバルクイナも。

れる手術をして、ネコの登録制度ができたんです。その後2019年に日本の法律が改正され、2022年に全国で登録制度が始まりました。

2021年、ヤンバルクイナは絶滅せず、やんばるの森は世界自然遺産になりました。世界自然遺産というものは、要するに地元にかかっている。世界タイトルだけど、自分たちが世界に対して残していくって宣言なんです。今、世界中が環境保全に関心がありますが、生物多様性が価値基準だったら東南アジアのほうが先進国です。この琉球列島の世界自然遺産は、世界で類を見ないくらい人の暮らしと近い。自然に寄り添って暮らし、残していくことを実現している。これこそまさに誇りだと思っ。

やんばるは国立公園になるまでも時間がかかり、たくさんの方があつたけど、学びだった。我々も一生懸命だったし環境省も頑張った。地元を説得して回り、国頭の森を保護区にして、国立公園にして、それが世界遺産につながって。地元の人たちが了解してくれたことがとても重要でした。

僕もブレッシャーがあつて、眉間に皺寄せてた時期がありました。救命救急センターができたとき、何かあるごとに来てくれる集落の無口なおじさんが飲み会でね、ふだん話らないのに、「うれしいよ、一緒にやってきてよかった」と言ってくれたんです。胸に響きました。みんなです。一つひとつ確認しながら、やってきたんです。改めてその大切さを教えられました。こんな人たちが集落にたくさんいる。だから今がある。もつと良いものにして、次に渡していきたいです。





「生き物を保護するには生息環境など種ごとの情報をしっかり残そう」と久高さん。

発送のお手伝いをして、姉が辞めた後は私が勤めました。環境庁ができた翌年です（※1）。

当時は日本中で森林伐採が問題でした。それで日本で初めて「緑のデモ」っていうのをやりました。霞ヶ関で「林野庁は木を切るのをやめよう！」って。新聞にも載りましたよ。その時代、独立採算制といって、伐採した木を売ったお金から林野庁のお給料が出ていたので、どんどん切っていたんです。それが問題だった。

国会議員で超党派の自然保護議員連盟の幹事長だった石垂先生（※2）の私設秘書をした時期もありました。後に環境庁長官になられたとき、やんばるの保護を取り上げてくれたんです。そのころ私たちがいつも「やんばる、やんばる」って必死で言っていたから。

その後WWF J（※3）の職員になって南西諸



「大変だったこともだいぶ忘れたわ（笑）。今は地域貢献を考えている」と市田さん。

島を担当しました。トキが絶滅したのを見ていたので、次に少なかったノグチゲラだけは「絶対絶滅させられない」って心に誓った。1985年、3団体共催で（※4）、沖縄で初のシンポジウムをやりました。県内外から約300人、本当にいろんな人が来てくれましたよ。私のやんばるへの思いは、そこからもっと熱くなったの。

だけど、大変なことがありました。東京で日本野鳥の会がやんばるの鳥たちを保護する「やんばる戦略」を立てて、沖縄の新聞社に相談に行ったら、社内抗争に巻き込まれてしまったんです。それがとんでもない大騒ぎになって、全国の支部からも責められて、自分の人生ってなに？ってもう

本当に悲しかった。もともとはノグチゲラを守りたいだけなんです。それで、もう人任せではなく「自分自身で行動を起こさなければいけない」と思い立ち、夫と話し合って、一人でやんばるに移住しました。若かった、30代でした。

その後も東京の雑誌社がやんばるまで来て、私の移住が変だとか、やんばるの物産を購入したら一部が寄付になる企画をおかしな金儲けだとか書いて、電車の中吊りに「あくどい日本野鳥の会」とまで出たんです。それが原因で、夫たちが雑誌社を相手に裁判を起こしました。最高裁で勝ちましたけどね。

久高さんとはそうなる前に林道で会ったよね。

久高 森の中で、豊子さんがやんばるクイナを見つけたら帰ろうとしていたところにすれ違って、「そこにいるじゃん」って見せたんです。

市田 久高さんは、私をこの自然に目覚めさせてくれた一人で、騒ぎの間も普通に接してくれました。それに40年前の沖縄はもつとのんびりで、みんな騒ぎを知らなかった。そのことを知っても、先に私を好いてくれたから問題にならなかったの。ウエルカムしてくれて、うれしかった。

私たちがいる喜如嘉は、バードウォッチャー憧れの田んぼがあって、移住前からやんばるに来るたび寄ってたんです。そのうち区長さんと親しくなって、ありがたいことに家まで探してくれました。移住してすぐ自然観察会を始めたんですが、この自然が素晴らしいのをみんな当たり前すぎて気づいてなかったんです。それを伝えていったことで、地元が徐々に変わった。今も大宜味村や国頭村の小学校で、環境教育を続けています。

なりませんよってことなす。

市田 この辺もやんばるクイナいるんですよ。うちの裏のほうで見たし、鳴き声もよくする。条件がそろると生息域は森林だけじゃないかもしれないね。

久高 日本もだけど、国で生物種ごとのインベントリ（目録）が作成されていないんだよね。生き物の保護をやるのであれば、生き物それぞれに生息環境が違うんだから生き物ごとのデータを取っていかなくちゃいけない。それらをつき合わせて重点的に保護が必要な領域が見えてくる。

一つの例を挙げるとね、「オキナワトゲネズミ」の番組を僕はNHKBBSで作ったんですよ。何年もかけて撮影して。だけどWWF Jや環境省林野庁も、オキナワトゲネズミは絶滅してもういませんって言ったの。そんな情報が入ったもんだから、僕はいるよって言った。映像を見せてやるよって。それで見せたら、なんでこんな映像があるんですかって。いない場所で行くら時間と金かけて調査しても、いない場所にはいないんだよ。僕に指摘されて2日後ぐらいに関係者が聞き取りに来た。

その場所に案内したら、1週間で彼らが想定したデータが全部取れた。そのデータを環境省でDNA解析した一連の報告書があるんだけど、僕らが介在したことは書いてない。だけど僕は森のどこにどんな生き物があるか、知ってるわけよ。日常的にフィールドワークをしているから。他の人たちの何十倍も時間をかけているし、山仕事の人たちからも情報をもらう。

思い込みで場所を選定し調査をすると種ごとの



市田さんの夫・則孝さん。元日本野鳥の会常任理事で現在はチョウも研究。

※1 公害問題から、1971年環境庁設置。2000年に環境省へ。  
※2 岩垂寿喜男（いわたれ、すきお）1929〜2001年。社会党衆議院議員（8期）、環境庁長官（第33代）、日本野鳥の会副会長。  
※3 公益財団法人世界自然保護基金ジャパン。世界100ヶ国以上で活動する自然保護団体WWF（World Wide Fund for Nature）の日本支部。

### 森の潜在力と人の保護活動で 国立公園、世界遺産へ

久高 沖縄では1972年ごろ、ダム工事から規模の大きな森林伐採が始まったんだけど、やむを得ないことだったりますんですよ。当時は水資源が乏しくて、夏になると那覇とか都市部では断水が当たり前だった。それを解消しようと動いたのが米軍で、東村で1968年に福地ダムの工事が始まるわけです。それが本士復帰とともに日本側に引き渡されて、その時点からダム工事が主要河川でどんどん進行した。で、僕らの活動で、奥

生き物に影響を与えかねないですよ。彼らがいるのは深い森じゃない。森の一番手前で、人の影響を受けやすい場所だったります。あえてそういう場所を生息地しているわけ。生き物の保護を考えるにおいては種別ごとの調査をしっかりしなさいってというのは、そういうことなんです。

市田 私たちも鳥を見ますが、山奥にはたくさんいない。限られた種類だけで、かえって里山にいてっていうのが経験的にわかっている。うちの夫も昔から、自然保護協会の人がある山の上のほうに行こうとすると、「自分は下で鳥を見るから」って行かなかったですね。だから私たちも久高さんの言うことってすぐわかる。山の中より、この境みたいなところですね。人間との関わりがある部分で多く見るっていうのは確かにあります。

久高 人が住まう場所っていうのは確かにはかつて彼らが生息する環境だったりしたわけじゃない。なぜ生き物は都市に出現するか、その理由が自分たちの暮らしと関係があることも考えておかないとね。

市田 やんばるクイナも今は絶滅の心配もないだろうけど、ちゃんと調べる、研究していく。大事なことだと思います。

今はやんばるを活かすことを考えられて幸せですよ。ここは宝がいっぱいでキラキラしてる。最近では、地域活性できないかなってときどき役場に行っておしゃべりしてます。昔一緒に野鳥観察してた子が今役場で係長なんです。したいことは、まだまだいっぱいあります。

久高 そうだね。今日はいろいろ言いましたが、楽しかったですよ。



喜如嘉の里山にもやんばるクイナが顔を出す。

間川の上流部を野鳥の会に買い取ってもらったことから、奥間川のダム工事が中断した。工事関係者にとっては目の敵だったと思うよ。でも、深く考えると僕らの活動が全ての伐採を止めたのかというと、活動の成果は微々たるもんです。1981年にやんばるクイナ、83年にやんばるテナガゴナが初めて見つかったでしょう。それらの生き物が出現することによって、彼らがものを言い始めたわけです。僕らの反対運動だけじゃ止められなかったものを、生き物が出現することによって世論が変わっていった。森を見る目が切っちゃいけない場所だっていう人たちが増えてきた。国立公園や世界遺産まで持っていた

本当の力は、そういう生き物たちの存在だったりするんだらうね。

当時、切られた森が元に戻るには400年と言われてた。実際は、そうでもなかったんです。伐り尽くされていた森は、今、景観上は元に戻っている。伐採された場所が数百年しないと戻らなかつたら、今の世界遺産ってないよね。森の潜在力は脆弱なものではないことに僕らは気づかなきゃいけない。

市田 やんばるに関わって40年、私たちもよく頑張ってきたよ。国立公園、世界自然遺産になって本当に良かった。活動の目標だったし努力が報われた最高の結果で、ありがたいです。

### 生き物ごとに適した環境がある 今こそ確かな調査、研究を

久高 森林管理の役人や森林組合向けの勉強会で、ちょっとした実験をしたんです。伐採して3ヶ月の場所、伐採して植林をして3年の森、14、15年経った森、そして60、70年の森、その4ヶ所にPCM録音機をセットした。どの場所でも同じ時間帯に1時間録音して、それを聞き分けさせたのよ。誰も正解が出せない。

健全に形成された森に生き物がわんさかいて当たり前前、やんばるクイナもアカヒゲも多分早朝から鳴き騒ぐはず。それがこれまでの自然の見方でもそうはならないのよ。音を聞くと60年の森よりも、伐採された場所に生き物が来て鳴いていた。それはどういうこと？ 僕らは目で見てものを判断してしまうけど、それは自然を見ることには

## 編集後記

正直なところ、取材前はやんばるに少々敷居を感じていました。生き物蠢く亜熱帯の森、聖地感すらある。撮影初日に向かった長尾橋までの山道もやたら長く、どこへ連れていかれるのだろう……と、それが着いた瞬間、バツと取り払われました。橋の両側にモコモコと広がる亜熱帯の樹々、そこら中で聞こえる鳥や虫たちの声。存在感がすごい。それに比べて人間の小ささとさたら！こんなところでいろいろ考えても意味がない。

やんばる最大の魅力は亜熱帯の森と生物多様性です。取材に入って、そこに人も含まれると実感しました。誰もが力強い光を放っているのです。

自然とともに生きてきた久高将和さんの「開発され尽くした森が蘇ったのは、自分たちの保護活動だけではない。森の力があつた」という言葉に、ハッとしました。東京で自然保護活動の中枢にいたながら、自分が動かねばと単身やんばるに移住した市田豊子さん、それを理解して支えた夫・則孝さん。力を合わせる大切さも感じました。地域を「守り、活かす」ために活動する山川安雄さんが林道バートル前に森の神様に祈る姿、盟友・金城幸夫さんがサワガニを車で轆かないよう追っ払う姿、忘れられない。長嶺隆先生はヤンバルクイナ保護と一緒にやってきた安田のおじいちゃんを想い、涙。鳥が好きすぎた少年は今も純粹さを失っていません。

生業と自然保護のいい形を実現している東村観光推進協議会の鳥袋裕也さん、渡久山真一さん、小田晃久さん。お三方の明るさも含めて全国のお手本となる組織ではないでしょうか。山に折り、海に折り、先祖に祈る神人という運命を引き受けた湧川ツヤ子さん。塩屋の鏡面のような海に感じた奥深さ、湧川さんの存在感と重なりました。その湧川さんが竜宮神を務める塩屋湾のウングミ、安田のシヌグなど、やんばるには森と海の恵みに感謝し、五穀豊穣を祈る祭祀があります。森と海の間で人々が暮らしを紡ぐ集落も、やんばるの宝。仲木いつ美さんはそんな集落への想いを、今日も瞳を輝かせて旅人に物語っておられるでしょう。人間も自然の一部、その中の一つの命。取材が終わるころにはやんばるから離れがたくなっていました。

この冊子を手にとってくださいましたみなさま、ここまでお読みいただきありがとうございます。生き物たちのにぎやかな声に包まれてみてください。取材にご協力くださったやんばるのみなさま、制作に関わるすべての方に心から感謝申し上げます。またお会いしたいと思えるみなさまと出会えて、幸せです。

株式会社オールアウト

やんばる国立公園  
いのち輝く奇跡の森  
守り活かす人々の御願  
国立公園ものがたり

発行月 …………… 2026年3月第1刷発行  
発行元 …………… 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室  
東京都千代田区霞が関1-2-2 中央合同庁舎5号館  
TEL 03-5521-8271  
<https://www.japantravel/national-parks/>  
企画・編集元 …………… 株式会社オールアウト  
東京都渋谷区恵比寿南1-15-1  
A PLACE恵比寿南3F  
<https://comp.allabout.co.jp/>

全体管理 …………… 土居里佳  
編集主幹 …………… 土居里佳  
デザイン進行 …………… 吉田拓実（一般社団法人ドット道東）  
アートディレクション …………… 名塚ちひろ（一般社団法人ドット道東）  
デザイン監修 …………… 鈴木美里  
デザイン …………… 青砥美穂子（Bluepine）  
村上三千雄（VILLAGEUP）  
取材・執筆・編集 …………… 永田知子  
撮影 …………… 久我秀樹（久我写真事務所）  
イラスト …………… 井上愛美（Caocui合同会社）  
校正 …………… 白尾典子  
写真提供 …………… 久高将和  
大宜味村観光協会  
やんばるホテル南浜森室  
やんばる自然保護官事務所

